

圓谷 弘

『集団社会学原理』構築への道のり

松岡 雅裕

1. 問題の所在

日本大学社会学科創設者（否、「社会学論叢」誌上においては日本大学社会学会設立者と記しておく方が適切かもしれない）圓谷弘（つむらやひろし、1888（明治21）年～1949（昭和24）年）が没して、今年（2018）は65年目となる。圓谷の生い立ちや、いかなる境遇のもとで学を志したか、さらには日本大学社会学科創設にいたる経緯等については、これまでも度々社会学論叢誌上で論じられてきた¹⁾。しかし、彼の研究内容に関してはどうか。氏の学位論文のテーマであり、圓谷社会学の代名詞ともなった集団社会学の内容に関しては、その名称の知名度の割には左程言及されていない。わが国社会学史上に圓谷が残した業績として語られるものは、せいぜい私学初の社会学科創設者、わが国初の社会学専門学術雑誌・月刊『社会学徒』の発行者としての側面である（川合 1998：259-261）²⁾。

筆者は、この欠を埋めるべく、圓谷の研究活動、とくに集団社会学の言説がもつ特異性、そのオリジナリティ、また（今後の予定ではあるが）当時の学界への貢献性・反響等を解説しようと思う。しかし、圓谷が扱った研究領域はたいへん広い。集団社会学の提唱のみならず、わが国資本主義がもつ特異性の分析、わが国および中国社会の社会政策的考察、大正・昭和年間の大衆文化の考察、さらには戦前期の欧州・米国情勢への言及等、誠に広大である（松岡 2008）。本論は、圓谷社会学の代名詞ともなり、氏の広大な研究活動そして発想の中心的原理・導きの糸ともなった集団社会学の、それも集団社会学の発想が確立する以前の形成期に焦点を当て、その言説のまだ初々しい、だからこそもっともピュアな本質が露呈している段階を氏の発表論文に沿って分析しようとするものである。

さて、圓谷集団社会学の概略を敷衍しておきたい。「社会学徒」1934年の第八卷第九号（通巻90号）裏表紙に圓谷の代表作『集団社会学原理』

発行に関する紙面広告が掲載されている。「文化を生命とする学徒よ！まづ本書を繙かれよ!!」という元気な見出しとともに、次のような内容案内が記載されている。

「社会学の個人的・観念的誤謬を解消せしめ、社会集団に存在する集団現象をあるがまゝに認識し、集団社会の新原理を確立すると共に、社会意識並に社会型態の学的新展開に基いて更に社会諸科学—宗教・道徳・法律・政治・教育・芸術等—の広範な部門の基礎理論に徹底的変革を齎す快著……著者はデュルカイム学派の社会学主義とドイツ現象学徒の社会哲学との二つの影響を受けつゝもこの二大潮流を凌駕して、その誤謬を完全に克服し、現代社会学の新理論を展開してゐる。本書は学界への非常警鐘であると共に、論述は簡潔明快にして、社会学入門書としても最適である。」

圓谷は、1920(大正9)年、日本大学専門部社会科(現在の日本大学文理学部社会学科の起源)を設立した後、1922(大正11)年から翌年にかけて文部省在外研究員として欧米に留学した。そこで知り得たデュルケムの社会学主義、そして1923(大正12)年に訪れた独フライブルク大学でのフッサール現象学に大に関心を持ち、この二大潮流の総合化を企画したのである。まさしく圓谷集団社会学の誕生である。したがって「集団社会学」とはいつても、今日の集団・組織現象を扱う集団組織科学のそれとは区別しなければならない。むしろヴェーバー流の行為者の動機を問題とする方法論的個人主義に対して、デュルケムの社会的事実としての集合表象がもつ拘束性を問題とする方法論的集合主義をイメージすればいいであろう。しかもそこにフッサールやブレンターノらの現象学的な世界解釈の視点を導入しようとして企てたのである。これなどは、かつてT.パーソンズが、ヴェーバーとデュルケムの両視点を統合化するなかで主意主義的行為理論を生み出していった企てと比較すると、すでにその先を見据えた議論であったともいえる。もちろん、当時のパーソンズの企てなど、圓谷は知る由もなかったが、しかし圓谷の研究構想は、今日でも刺激的である。

ただ、この圓谷集団社会学構築にいたる経緯を当時の(主に)社会学徒誌上の論文から探る試みには、いくつかの問題点も存在する。それは、発表論文の多くが講演会における講演録という形をとっているため、圓谷の

発言根拠となる引用文献等が示されていない点である。このような限界を抱えつつも、可能な限り圓谷集団社会学の形成期を明らかにしていきたい。以下、圓谷集団社会学の形成を跡づける代表的な三論文、「階級の社会学的一考察」「人格主義の否定」、そして「社会学徒の観たる日本芸術」を検討していく³⁾。

2. 集団社会学プロトタイプとしての「階級の社会学的一考察」論文

圓谷の集団社会学的考察が初めて文章化されたのは、「世上よく聞く、階級闘争の理想は無階級の終局的理想境の建設にあると。」という文章で始まる1929(昭和4)年の「社会学徒」第三巻第一号「階級の社会学的一考察—階級の永存性と上下観念の厳存性—」である。当論文において、圓谷は、「然るに其の理想化の帰結は、依然として在るがままの現社会に展開される階級の現存を認識せしむべく、余儀なくせしめる」(圓谷 1929: 1) と、冒頭から階級的な上下観念の消滅が、いかに困難な課題であるかを強調している。

「換言すれば、無階級理想の標榜下に於ける帰結としての社会事象は、其処に理想の否定としての階級の現存と上下差別の厳存となる。然らば階級は永久に而かも上下に存在し得るものではなからうか、所謂階級と上下差別の観念とは、鉄則として永久に此の社会に存在するものではなからうか？」(ibid: 1)

ここまでの、当論文第一章に記された圓谷の問題意識である。無階級社会の建設を標榜した革命も、(前近代的な身分制ともいえる)階級的上下性の厳存を帰結したままではないのか、という圓谷の認識である。当時の世界情勢をみるに、市民革命以来の欧米の民主革命、さらにはロシア革命の帰結までもが、圓谷の認識には、無階級社会という近代理想郷の建設からは程遠いという素朴なまでの感慨が漂っている。しかし、この素朴なまでの認識を一笑に付すことはできない。いよいよ、ここから圓谷は、「之等の疑問に答へるが為には、先づ第一に階級観念を学的に決定し置く必要がある」(ibid: 1) と、続く第二章で集団社会学の発想を披歴し始めるのである。そこでは、圓谷の階級を分析する視点が、集団、とくに団体内における統制権の所在に注がれていることに注目したい。彼はいう。「之

等の階級云々は団体内に一つの小団体を認め、而かも此小団体が此の全体団体の統制権を把握せるや否やに観点を置くものである」(ibid: 1) と。

「換言すれば、全体団体内に内存する小団体は、其全体団体の統制権を把握することに於て一政治現象に就て言へば政治団体としての国家に於ける政権の推移に依て一或は貴族階級となり庶民階級となり、或は征服階級となり被支配階級となる。又、経済現象に就て見れば、搾取階級となり被搾取階級となり、ブルジョア階級となり、プロリタリア階級となる。」(ibid: 1)

圓谷の分析の単位が、今日の社会学のように行為者の「行為」やそれを導く「価値」といった所にあるのではなく、まずは集合現象としての「団体」にあり、さらにその分析視点が、そこにおける(統制権等の)諸要因の布置連関にあるという点に特徴がある。

「そこで世上の所謂階級なるものを学的メスに依て掘り下げる時は、「一全体団体内に内存する小団体が、其の全体団体の統制権を把握することに於て、社会観としての階級観の存在を凝視することを得る」と観念することが出来る。」(ibid: 1-2)

以上のように、圓谷は、当論文第二章において、彼の「集団社会学」独自の認識視点を展開させている。しかし、ここには、未だ明確なデュルケムの視点というほどの集合表象自体への着目と分析の姿勢はみられない。ただ、集合現象への着目の「強調」が存在するといった程度である。しかし、この課題は、つづくフッサールの現象学的視点の導入とともに、タイアップされながら果されていく。

つづく第三章では、「以上の如き階級観念の決定に次で、私は階級現存の事実の検討に移る」と、いったん圓谷は、英国、米国、ドイツ、およびロシアといった全体団体たる「国家団体」の政治現象分析に取りかかっていく。対象となるのは、英国における保守、自由、労働の各党、米国では共和、民主両党、ドイツの社会民主党と共産党、ロシアにおけるボルシェヴィキ等々の、彼の言葉をかりれば国家団体内の「小団体」である。圓谷は、これら小団体が、一旦全体団体たる国家団体の政権を奪取するや、国

民（圓谷の言葉をかりれば「国家団体成員」）の小団体成員（つまり、政権閣員）への志向＝意味づけにおいて変更が生じてくることに注意を向ける。ここにおいて、われわれはフッサールの現象学的解釈の援用をみることが出来る。つまり、国民は、政権を奪取した小団体の閣員に対して、そのステイタスは、己より上の階級成員であるという価値意識を投入し始めると述べる。すなわち、「その大統領のそれへの意味づけ、委員長のそれへの意味づけには、君主のそれに、王のそれにと同じ範疇の意味づけを発見するを得る」（ibid: 2）と。この、新たな意味づけのプロセスを、圓谷は、反対勢力の抵抗過程の中から逆説的に推論していく。

「例へば、革命後のドイツに於てかのエベルト一度大統領となるや、当時の反対派の新聞紙が彼の前身の給仕人なることを頻りに宣伝したる如きは、其の反対派がカイザーへの意味づけの世界の展開を否定せんとした努力なりと観察することを得る。」（ibid: 2）

これと同じ傾向は、英国労働党に対する、またロシア革命後のレーニンに対する世上の反応にも見て取れると圓谷は述べる。ここから、圓谷は、「上下差別階級の永続性の厳存」理由を次のようにまとめていく。つまり、(1) 特定小団体による全体団体の統制権の把握にもとづく「階級の存在」、(2) それに対する国民の「上下観念」という（前近代的な）価値意識の投入が「上下差別階級の永続性の厳存」という帰結をもたらすと。圓谷は、世上のこのような展開を、「実証より帰納し来る原則」と呼んだ（ibid:2）。このように、まず、社会現象の分析単位を集合現象たる「団体」に定め、そこに全体団体と、その内部に生じる（統制権の有無による）小団体を区別し階級の实在根拠とする。さらに団体をもつ集合的価値意識を想定し、その階級的上下観念の投影から階級の上下差別的認識根拠を導き出すというのが当時の圓谷の分析手法であった。これに関して、いよいよ最終章（第四章）では、彼の集団社会学の学的原理が総括されていく。

圓谷は、人間が社会的動物であるという前提のもとで、まず、「集団」こそが社会生活の基盤であり分析単位となる正当性を強調し、ここで初めてデュルケムの視点を援用していく。しかもそれは、デュルケムの『社会分業論』（Durkheim 1893）に現れた進化論的視点であることがうかがえる。

「集団が人人の生活の始まりであることは、学的に既に解明されている。而かも一つの全一としての集団生活が、全一としての集団精神を生む事は、已に集団の研究に於て証明せられている。而かも其の現象に於て、強制力を有し拘束力を生む所の集団精神たる所謂社会意識は、一方に於て集団の宗教現象に表はれ、他方に於て政治現象に表現する。而かも集団の現存と其の継続と其の発展は、潜在または顕在の意識下に於て、其の団体を一全体としての現存の価値態と化する。」
(ibid: 2)

圓谷は、国家における政教分離の進化的傾向を、祭政一致から祭（宗教）と政治の分化、つまり神性政治から世俗的権力政治の誕生とみなし、神聖なる祭り事に対する冒瀆を禁ずる宗教的拘束性を脱し、自由なる人事の批判をなす「国家内小団体」たる政党の誕生と判断する。しかし、ここで圓谷は、「だが」と彼独自の論点を提示する。デュルケム的な集合意識（圓谷のいう集団意識）論は、神聖なるものから世俗性が分離した後も、集団成員の価値判断に、歴史的に築かれてきた（集積たる）意識の基層から自由ではない拘束性が加えられるとする。

「団体に於て、神話伝説教義等の生成過程と、其の集積たる社会意識形態に於て、其の認識仕方たるや此の前述の基礎層たる神話意識が、非常に大なる基調として色づけ作用している結果、現代人にもその姿は強く生き生きとして継続しているのである。従うて一度祭祀より分離した政治に於ても其の団体の全一体の当事者となるや、其の団体のその当事者への意味づけは、前述の認識作用の志向となるの結果とならざるを得ない。」 (ibid: 3)

つまり、成員の神聖なるものに対する価値意識は、時代が移ってもその拘束性を失わず、世界に対する意味づけの基本的な志向性として同様の価値態を保ちつつ、今度は世俗的階級的な価値意識という形で現れてくるとする。

圓谷は、結論として「上下階級の永続性の根拠」を二点にまとめる。その一は、「集団は強制力と外在性とを本有する」ことであり、その二は、「強制力を本有する集団の持続と其の集団意識の集積性の必然の結果は、

其の内有する階級をして上下の価値態として出現せしむる」というものである (ibid: 3)。前者は、集団の代表的当事者（権力者団体）は、他の成員には強制力の把握者として差別的外的に映ずるといふ。これが、圓谷のいう「階級永存の原則」である。一方、後者は、集団の強制力と外在性は、まずその集団に「宗教性」と神聖性を、つぎに世俗的政治性を発生させる。この神から王へという価値意識の加層化のなかで、王の神聖視が生じる。ここに、集団の代表的当事者（権力者団体）およびその階級は、価値意識において「上の階級」として成員に意識されるという。

「要するに集団には階級存在す。而かも上下の価値差別が必然的に付帯する。之れぞ上下階級の永存性は集団生活をなす上に免るゝを得ない必然的なる鉄則なりと云ふ所以である。」 (ibid: 3)

圓谷は、本論文を締めくくるにあたって次のように述べる。革命時においても階級と上下差別の観念は永久不変のまま据え置かれ、権力当事者集団の遷移あるのみであると。私たちは、当論文に、デュルケム社会学とフッサール現象学を総合化しようとした圓谷集団社会学の原初的プロトタイプをみる事が出来よう。

3. 「人格主義の否定」論文にみる個人表象排除の論理

続く第二論文は、「社会学徒」1933 (昭和 8) 年の第七卷第一号 (通巻第 70 号) に掲載された「人格主義の否定」論文である。これは前年の 1932 (昭和 7) 年 6 月に開催された日本大学社会学会講演会における講演録という形をとっている。ここでは、「何々主義」と呼ばれるイデオロギー形態が、集団生活の産物であることを自己の集団社会学の観点から論証し、併せて、「人格主義」というものが何ら集団生活上の背景をもたない、たんなる観念遊戯、個人表象であるとして否定しようとするものである。まずは、イデオロギー形態たる「主義」を分析する圓谷の研究目的を探ってみよう。

「今ここに余は、「主義」を社会形態として観察せんとするものである。(中略) 余がここに此の「主義」を社会学の対象として取り扱うのは、其れは実に「主義」を社会形態として見るものであって、「主

義」を集団の拘束事象として理解せんとするものである。」(圓谷 1933: 1)

当論文の巻頭で、圓谷が用いる「社会形態」という言葉の意味がはっきりとしないが、おそらくこれは、デュルケム社会学でいうところの「社会的事実」を指し示すものだと考えられる。そこで上記文章の「社会形態」を「社会的事実」に置き換えてみると、

「今ここに余は、「主義」を社会的事実として観察せんとするものである。(中略) 余がここに此の「主義」を社会学の対象として取り扱うのは、其れは実に「主義」を社会的事実として見るものであって、「主義」を集団の拘束事象として理解せんとするものである。」

と、じつに明確に、圓谷がデュルケムの発想で、この「主義」というイデオロギー問題に取りかかろうとしていることが読み取れる。

さて当論文では、表題にあるごとく、「人格主義」について集団社会学の立場から分析を試みている。この「人格主義」なる言葉は、今日ではあまり使われなくなった用語だが、要するに「人間として踏み行ふべき道、立場」をさす言葉として解釈されていだろう。ここに圓谷は、一種の拘束現象の存在をみている。

「しばしば吾々は『人格上云々』なる叫びを聞く。斯かる人格上なる用語の下に、吾々は「斯うしてはならぬ」と云ふ如き拘束事象を認識することが出来る。此の拘束事象の表現たる人格主義が、集団成員を拘束すると云ふ意味に於いて、其れは形態化(社会的事実化=松岡注)せる社会事象であり、従って、社会学の研究対象となり得るものである。」(ibid: 1)

圓谷は、ここでデュルケム的に人格主義を分析する前提として、まず、この「主義」を社会的事実としてとらえるために、「存在事象としての主義」と「非存在事象としての主義」を区別している。そのうえで、圓谷は集団社会学が問題とするのは、あくまでも前者であることを強調する。この点を彼は、武士道・武士主義を例証として説明する。

「此の武士道即ち今日の言葉で表現するならば武士主義、其れは恰も町人道が町人主義と云はれるが如く、此の武士主義こそは武士の行ふべき道、即ち武士道を志向する処のものである。実に道とは主義に外ならないのである。(中略) 即ち、武士道とは、武士集団が先づ所産されて、其の武士集団の慣行と慣習でありし姿が、学問的に反省され規定された時に認識された処のものである。」(ibid: 1-2)

つまり、武士主義(武士道)は、武士集団における社会生活上の慣行、慣習から生じた「存在事象としての主義」であるという。これに対して、圓谷は人格主義なるものが「非存在事象としての主義」であると、その対照的な性質を強調している。その前に彼は、まず当時の人格主義が、カントの発想によって規定された無上の命令性をもつ道徳性(定言命法)に基礎づけられたものと述べる。「即ち人間を手段としてはならぬ、目的とせざるべからずと云ふカントの倫理学説は、個々の人間に絶対尊厳性を付与する」(ibid: 3) ことによって生じたと。カントによって基礎づけられたこの人格主義を、圓谷は社会学的に考察するわけだが、はたしてそこに、この主義を生んだ土壌たる集団生活上の所作、つまり存在事象としての根拠があるのかどうかの問題となる。圓谷によると、このカントの人格主義の提唱は、資本主義の勃興とその時期を同じくしているという。

「実に彼は、町人集団即ち資本主義集団が偉大なる力を以って上昇する時、個人の尊重を叫んだのである。即ちカントの人格主義が生まれたのである。絶対の姿は個人の姿にしか存在しないと云ふ此の人格主義は、個人事象の姿に基礎を見出したものである。」(ibid: 3)

ここまで読むと、いかにも資本主義社会における搾取されたる労働者階級の、そして人類の尊重と解放といった、マルクス主義的な発想をイメージしてしまうかもしれないが、どうやらそうではないらしい。むしろ、資本主義の学的基礎付けをなした『国富論』に代表されるアダム・スミスの功利主義的思想が出現してくるその「個人主義的基礎付け」といった役割をカントの倫理学は担わされているという。

「此处で現代資本主義に眼を投ずる必要がある。資本主義の構成中

枢は個人主義であり、功利主義であり、機械工業からすれば合理主義である。其処に資本主義の学的基礎付けがあり、個人の飽くなき営利の姿が展開しているのを見る。アダム・スミスの富国論によって基礎づけられるものは、実に個人が利潤を追求することにあると云ふのである。此のスミスの功利主義を探求するとき、その基礎にカントに依る個人主義の姿を見出すことが出来る。実に資本主義の要素は、カントに依る個人主義の上にスミスの功利主義を付加したものである。カントの人格主義は資本主義集団への個人主義的基礎付けとしての説明に過ぎぬと考えざるを得ぬ。」(ibid: 3)

つまり、カントの人格主義は、何ら現実の集団生活に根拠をもつ存在事象としての言説ではなく、むしろ逆に、資本主義を、そしてそれを基礎づけようとしたスミスの功利主義を正当化するために利用された操作的な言説であったというのが圓谷の考えだ。さらに圓谷は、カントのみならず、スミスの功利主義も集団生活とは切り離された「非存在事象」を前提にしているという論を展開していく。つまり、資本主義の制度的構成を考えると、それは「仏蘭西革命を土壌とし、其れにアダム・スミスの功利主義が加わって出来ている」(ibid: 3)と考えられ、このフランス革命のテーゼそのものが、集団生活とは切り離された非存在事象たる理想としてのスローガンだと断じるのである。

「仏蘭西革命のスローガンなる個人の絶対的自由平等と云った価値の姿は集団と何等関係なきものである。此れを科学的に見るならば、個人主義の基礎は集団事象に基づかざる、即ち存在せざる一つの架空事象である。存在せざる事象に、個人の絶対的自由平等と云った空想を描いた叫声なりと云へる。此の立場から云へば、カントの絶対的尊厳性たる人格主義は、存在せざりしものを跡づけんとする空想以外のものではないと云ふことになる。即ち哲学者の思惟の遊戯なりと云はねばならぬ。何故ならば、社会事象は個人事象ではない。」(ibid: 3)

これはなかなか手厳しい。さらに、圓谷は、アダム・スミスの功利主義も「個人に基礎づくところの、存在しないものをするかの如く考へた思惟の遊戯に外ならぬ」(ibid: 3-4)と断じてやまない。つまり、個人的な理

想的感慨といったスローガンなどは、何ら現実の集団生活とは関係のない非存在事象としての主義であり、思惟の遊戯に他ならないと述べているのだ。しかし、ここで私たちが圓谷の説に対して抱く素朴な疑問は、そのような個人的な理想的価値観ですらも、何等かの集団生活の帰結ではないのかという点である。この点に関する圓谷の根拠づけをみると、

「価値を研究対象とした時、結論としては、価値は集団の所産であって、個人の先験的所在ではない。其れ故価値の高低は集団存在を前提として考へられる。(中略) 其れ故、価値は当該集団に即してのみ、其処に於いてのみ判断せらるべきものである。」(ibid: 4)

つまり、価値とは、集団生活における、たとえば制度化された慣行、慣習として具現化されているものであり、断じて個人の価値観、スローガンといったような理想的感慨の言説として先行されるような存在ではないと述べられている。

「カントに依って個人に絶対的価値を認めることは、天から降ったものであって、科学的基礎をもつものではない。人格主義は其の学的基礎づけを見出す限りに於いては、存在しないものを存在するかの如く考へた観念の遊戯にすぎぬと断言し得る。(中略) それ故人格は集団格となることによってその生命を見出すべきものである。」(ibid:4)

ここに、個人表象を排し、社会的事実としての集合表象をその分析対象に定めたデュルケム社会学の圓谷集団社会学への影響をみることができよう⁴⁾。圓谷によると、カントが、わが国知識人層に絶大な影響力をもったのも、「日本の資本主義上向期における、その個人主義的基礎づけ」を必要とした時流に外ならなかったという。

「併し集団との関連に於いて云ふならば、飽く迄も非存在のものである。其れ故資本主義集団を志向する資本主義を個人事象から云ふと、其れは集団を否定せんとする遊戯的原理也と考へられる。(中略) 此処に人格主義が清算されんとするも当然であらねばならぬ。」(ibid: 4)

さらに圓谷は、カント学説を論じる今日（当時）の修身道德の授業がいかに意味のないものかにまで言及する。「今日学校の修身の時間が居眠り時間となりしは、当然のことである」と。それは、わが国資本主義の発展に更なる発破をかける号令以外の何ものでもないと論じられている。ここで、圓谷のじつに力強い、かつ圓谷らしいまとめ方となる結語を紹介しておこう。

「たまたまカントはその役者に過ぎなかったのである。今や観念遊戯を去り、在るがまゝのDaseinへの凝視となり、再思考となり反省となり、先哲としてのカントも学史上の一存在に過ぎざる姿が判明し来って見ると、此処に人格主義の吊鐘が木だまして響き来るを否定するを得ぬ。（中略）今や、現存在への関連に於いては、人格主義は自己韜晦（とうかい）の煙幕を去って、在るがまゝの姿に於いてはっきりと自己の遊戯性及び非存在性、非科学性を暴露するに至った。実に人格主義は資本主義とその運命を同じくせねばならぬものである。」
(ibid: 5)

4. 圓谷集団社会学の初期到達点「社会学徒の観たる日本芸術」論文

圓谷の初期集団社会学の構想が、ほぼ完成をみせたのが1934(昭和9)年の「社会学徒」第八卷第八号(通巻89号)に発表された「社会学徒の観たる日本芸術」であろう。ここには、デュルケムばりの社会学主義と、集団(団体)を足場にして世界解釈(状況の意味づけ)を発想する現象学との融合が明確に見て取れる。しかも本稿が、同年6月17日、日本大学芸術科講堂にて開催された、日本精神協会、日本文芸協会共同主催の講演会での講演内容であるところから、いたって身近な芸術事象を集団社会学の原理的な視点に立ち要領よくまとめた啓蒙的内容となっている。すなわち、この段階において、圓谷の社会事象に対する原理的な分析姿勢は、ほぼ固まったと考えていいだろう。

ところで、圓谷がよくとる常套手段として、世間一般の常識的見解に対する疑問と反論の提示、そして社会学、さらには集団社会学的手法による私見の提示といった手順がここでも披瀝されている。本稿では、いわゆる「芸術至上主義」に対する疑問の提示から説き起こされている。

「私は社会学を専攻として居る者であります。従って社会学の立場から芸術を云々するのは縄張りを広げすぎるのではないかと御小言を蒙るかも知れませぬ。併し日頃社会学の立場から見て、在来の芸術観及び今日の芸術の説明に対して、それをその儘承認することを得ないと云ふ考へをもって居る者であります。其の意味に於いて、社会学の学徒が此の演壇に立つと云ふことも、社会学方面に於いては芸術をどう観て居るかと思ふ意味に於いて諸君の御参考になるであらうと思ひます。」(圓谷 1934 : 1)

今日とは異なり、社会学に対する世間の認知度が低い当時としては、一種の啓蒙という意味でも圓谷の論の説き起こし方は興味深い。さらに、圓谷一流の常識的見解に対する疑問と反論の提示となる。

「過去及び現在に存在して居る芸術は芸術家でなければ分からぬとか、或ひは芸術は芸術家のための芸術であるとかいふ、芸術オールマイテー、即ち学徒の言ふ芸術至上主義なるものが現代一般に容認されて居るのでありますが、此の芸術至上主義はその儘容認し得るであらうか。社会学徒はこれ等を如何に考へるであらうかと云ふ建前から、芸術至上主義を中心にして、現在の芸術を観察すると、結論は之に対して、否定を与へんとするものであります。」(ibid: 1)

少々、前段階の前置きの引用が多くなってしまったが、圓谷の特徴ある考証・説得手法をご理解いただくためであるので、どうかご理解いただきたい。

さて、圓谷は社会学主義、つまり自己の集団社会学の立場から、あくまでも社会的事実としての芸術現象に注目する。言い換えれば、個人の頭の中に思い描かれた個人的事実としての芸術事象ではなく、社会生活のなかでだれもがその「存在」を認識し共有しうる社会的事実としての芸術現象への着目である。

「吾々の方(社会学界=松岡注)では、必ず存在して居るものを先づ最初に研究の対象とする。否、存在して居ないものをば、科学の立場をとる社会学に於きましては絶対に研究の俎上に載せないのであり

ます。それでありますから、芸術に対する吾々の研究も、日本に於けるあるが儘の芸術事象は如何なるものであるかと云ふ存在との関連に於て吾々は研究の一步を踏出さなければならぬのであります。」(ibid: 1)

このように社会的事実を重んじる集団社会学の立場から、圓谷は、例として鎮守の森を中心として展開されている(「農村における農村青年の歡樂の一つ」と圓谷は述べる)「盆踊り」事象、東京における(劇場・舞台公演される)「歌舞伎」や「能楽」、さらに当時の代表的な大衆娯楽としての(「とくに若人を惹きつけている」と圓谷は述べている)「活動写真」をとりあげている。たとえば、農村共同体における鎮守の森を中心とした盆踊りは農村型芸術。また能は、歴史的存在としての芸術事象として、その発生契機は過去の貴族階級にあり、さらに封建制度下の武士階級が洗練させてきた芸術形態。歌舞伎は町人階級の中から生まれ出た芸術形態と分類している。同様の視点から活動写真は、現代工業都市が生み出した芸術形態、すなわち工業芸術と述べている(ibid: 1-2)。このように、圓谷は、芸術事象を、共同的な社会生活が生み出した社会的事実ととらえ、あくまでも、芸術家が生み出した「天才論」、つまり「芸術至上主義」の立場を排している。

「此の芸術至上主義の姿に対して先づ吾々が科学的な、社会学的な認識を与えんとすれば、芸術事象の単純な原始的な姿に遡ることに於いてのみ、其の単純な原始的な芸術事象を研究の俎上に載せることに於いてのみ、其の中から初めて芸術の本性を引張り出すことが出来るのではないか。」(ibid: 2-3)

この表現は、明らかに、もっとも原初的な宗教(トーテミズム)の分析が、宗教の本質の分析に役立つとしたデュルケムの『宗教生活の原初形態』(1912)で用いられた手法の踏襲に基づいていることは明らかであろう。圓谷は、農村共同体における鎮守の森を中心とした(盆踊りのような)農村型芸術の起源を、歴史的に遡って突き詰めようとする。圓谷がそこに見出したのは、原始集団の会合、共同生活である。

「彼のトーテム神或は人格神を持たない前、彼の一つの部族、氏族、部落の存在を生命とし、其の発展の政治の建前から、彼等が一ヵ所に会合する。言い換へれば原始集団に於いて共同の食卓に就いて食事をし、生産消費を共にし、いつも一つの集団的な生活を営むあの姿に於いてのみ彼等は彼等の生活を全うしたのである。(中略) この群集的な生活形態、此の中に何とも言い得ない所の愉快的姿感ずることが出来るのであります。此の群集的な姿こそはやがて宗教事象を産出し、やがて二次的芸術事象を展開し行く所の一つの存在ではなからうか。」(ibid: 3)

この農村共同体の起源ともいべき原始集団の生産消費を共にする中で生じる生活の苦楽が、やがて芸術へと昇華していく。圓谷は言う。「この一ヵ所に於ける集団の舞台に於いて、且つ自分等の生活の舞台に於いて、彼等の生活が再表現された時に、之を観衆が見て其処に愉快的或ひは悲しい集団の感情の躍動を感じた時に、其処に所謂今日の芸術事象としての姿が生まれて来たものである」(ibid: 3) と。ここでも圓谷は、「集団の感情の躍動」という表現で、集合表象としての芸術という認識を根底にすえている。したがって、芸術的天才に帰依する、個人表象としての芸術は存在しないと結論づけていく。「従って個々に離れた姿に於いては、其処に芸術の姿の発生産開と云ふものを見出すことは出来ない。斯う云ふことを吾々が科学的な立場に於いて理解した時、凡ゆる芸術事象なるものは集団から離すべからざるものである。集団生活が再表現される所に芸術事象があるのである。」(ibid: 3)。この集団生活から生じる集合表象としての芸術事象の発生という考えは、さらに神楽の分析においても適用されていく。神を慰めるものと解釈される神楽も、あくまでも「其の集団人が一緒に集まって楽しむ所に発生」契機があり、人格神の歴史的形成段階で「神楽が神を慰めると理解されて来たのではないか」と述べている。ここには、集団生活を足場にして現象の意味づけがなされるという、圓谷集団社会学の現象学的視点がうかがえる。この観点から圓谷は、芸術至上主義は、ちょうど彼が「人格主義の否定」論文で言及したように、あくまでも「後年学問が観念的形態で発展をとげた後に於いて発明された所の、個人を至上とする立場で考えて来た学問観念の結論として招来したものであって、けっして「あるが儘の芸術起源と芸術事象を理解するものでは絶

対にあり得ないと云ふことを言わんと欲するものであります」と述べている (ibid: 4)。

「従って此の意味に於いて、芸術の発生及び其の存在と云ふものは、必ず集団との関連に於いて理解すべく、斯く理解することに依つて其処に芸術社会学の姿は展開して行くのであります。それであるから、盆踊りは所謂農村型の集団形態に於いて初めて芸術事象として考えられる。」 (ibid: 4)

この、芸術は集団事象であるという命題に則って、圓谷は次に能を考察する。そこでは、能は武士集団の生活の再表現された現象形態であると述べられている。同様に、商人集団もその集団性においては芸術の発展規定を有しており、そこに町人の生活を描いた歌舞伎が生み出されてくると。ここで興味深いのは、「でありながら」、町人生活の再表現である歌舞伎のなかに、なにゆえ武士階級が重んじた「義理」という観念が多用されているのかという点に関する圓谷の考察である。圓谷は言う。「此の時の支配形態は武士集団であったと云ふ意味に於いて、武士集団の拘束力は町人集団の生存を否めざるを得なかったからであります」 (ibid: 4) と、あくまでも、自己の集団社会学の立場を堅持し明言している。同時に、この武士集団、あるいは町人集団が生み出した能や歌舞伎の今後は、それらが時代の主流としての拘束基盤で亡くなった現在、両者の未来はけっして生易しいものではないとも述べられている。

さらに、今日の東京において、なにゆえ盆踊りが活況を呈しているのか、これは農村に特有な集団生活が生み出したものではなかったのかという点にも言及し、「それは東京人の多くは田舎から来たものであって、意識の姿、考へ方、行動の姿に於いて農村生活の根が切れて居ないと云ふことを逆に証明する事象であると思うのであります」 (ibid: 5) と、明快である。拘束力を持つ農村生活の根が断ち切れていない都会人は、懐かしき郷土芸術としての盆踊りを喜んで迎えているが、「もし彼等がはっきりと農村から根の切れて居る所謂工場型大都市人であるならば、此の盆踊りをかように喜んで迎える筈がない」 (ibid: 5) と、少々断定的ではある。

ところで、圓谷が今日の工業都市生活の再表現が生み出したという工業芸術たる映画 (活動写真) はいかに説明されるか。圓谷の考察は、映画が

テクノロジーの進展に導かれた総合芸術であるという前提に立つならば、それを工業芸術と呼ぶ評価も肯定される側面をもっていよう。そこには、明らかにテンポ良い映像表現でしかなしえない「あの忙しい工場生活の再表現」が存在する。しかも、孤独な工場労働者の生活の再表現ともいべき、暗い劇場での観客同士の没交渉という鑑賞スタイルも生まれている。しかし圓谷は、この工業芸術の領域は、「活動写真だけに全部満足の姿を見出すことは出来ない」という。活動写真は、工業芸術、すなわち「忙しい工場生活の再表現として僅か一步入っただけ」のものに過ぎず、過去のわが国の諸生活形態から生み出されてきた様々な芸術の蓄積の上に、今後、大都市工業生活に立脚した様々な芸術成果が展開されていくであろうと述べている。

「従って芸術の携わる今後の新人が如何なるものを大都市芸術事象として展開するであらうかと云ふことは、如何なる社会存在—生活存在が大都市にあるのであらうか、と云ふことを理解することに於いてのみ見透し得られるのである。此の大都市芸術事象の未来に就いての展望は、此の契機に於いてのみ発見することが出来ると思うのであります。」(ibid: 5)

5. 総括的考察

では、ここで今回取り上げた三論文の、とくに圓谷集団社会学の発想と分析的手法を総括しておきたい。

まず第一論文「階級の社会学的一考察」では、圓谷は現象の分析単位として集合的な事実としての団体に注目していた。つまり、集団こそが社会生活の基盤であるという「学的に既に解明されている」というデュルケムの社会学主義を前提に、兎にも角にも集合現象への着目という、圓谷集団社会学において核となる認識視点の提示がなされている。つぎに、この団体を足場にして「強制力を有し拘束力を生む所の集団精神」、つまり集合的な価値意識、集団意識が生み出されてくるとする。むしろ圓谷の言葉をかりれば、「其の団体を一全体としての現存の価値態と化する」ほどに、集団は価値態と同然であると。さらに強制力と拘束力を持つこの歴史的な集積たる集団精神でもって、現象学でいうところの世界解釈がなされてい

く。したがって、世界解釈をなす主体は個人ではなく、価値態たる集団であると。ここには、社会学主義と現象学の総合化という、圓谷集団社会学のプロトタイプとでもいうべき学的姿勢が打ち出されている。

続く第二論文「人格主義の否定」では、集団生活の背景をもたない非拘束的な個人表象の徹底的な排除が企てられていた。「主義」というイデオロギー形態が、「～であらねばならぬ」という拘束力を有している点では、まぎれもなく社会学の研究対象たる社会的事実であるが、そこには、「存在事象としての主義」と「非存在事象としての主義」の区別があるという。社会学が問題とするのはもちろん前者であるというのが圓谷の見解である。社会生活上の慣行、慣習から生じた「存在事象としての主義」と比較すると、たんなる呼びかけ、命令、理想的スローガン等の「主義」は、何等社会生活上の背景をもたない「非存在事象としての主義」であり、個人的な思惟の遊戯であると。第一論文で述べられていたように、集団はそれ自体が価値態であり、そこから生み出されてきた社会的事実と、「天から降ってきた」ような個人の思惟、観念の遊戯とは区別されなければならない。社会学は、いや自己の集団社会学は、断じてこれらを区別すると。むしろ、「存在事象としての主義」に対する現象学的な「あるがままのDeseinへの凝視となり、再思考となり反省」となっこそ、科学的な社会学は成立すると論じられている。ここには、集団社会学の対象としての集合表象を明確に個人表象から切り離し、さらに現象学的視点を再定位するという意味で、第一論文を、さらに精緻化させる圓谷の試みが見て取れよう。

最後の第三論文「社会学徒の観たる日本芸術」では、芸術を個人的天才に由来する個人表象ではなく、共同的な社会生活が生み出した拘束力を有する集合表象にとらえ、芸術至上主義という考え方を排していた。同時に、芸術を生活の再表現（再思考、反省）による解釈的産物と規定することにより、現象学的視点を重視する姿勢をも堅持している。ここにおいて圓谷の研究視点はほぼ確立し、今日圓谷社会学の代名詞ともなっている集団社会学のさらなる展開が可能となっていくのである。

圓谷集団社会学は、次なるステージにおいて、学界への「集団価値の提唱」という形でのアピール、学位論文の執筆と『集団社会学原理』の公刊、さらには、これに呼応した三木清、松本潤一郎、本田喜代治、古野清人、田辺壽利らによる検討座談会の開催、そして高田保馬による書評の発

表へと続いていく。これらの詳細については、後日改めて発表の機会をもちたいと思う。

(追記) 本稿脱稿直前に、本学会会員（元日本大学教授）海野力先生の訃報に接した。注欄にも記したように、氏は圓谷の生存する最後の教え子・証言者たる研究者であった。ここに、謹んで海野先生のご冥福をお祈りし、未熟な本稿を先生の御神前に手向けたいと思う。

注

- 1) 最新のものとしては、2008年7月発行の社会学論叢No.162「円谷弘博士生誕120年記念号」がある。そのなかで松岡雅裕は、32歳という若さで社会学科を創設し代表教授となった圓谷の教育者・研究者としての足どりを追った「円谷弘博士生誕120年に寄せて—青年大学教師・円谷弘が走る—」、また、氏の著作の変遷を紹介する「円谷弘のBibliography」を寄稿している。同時に、圓谷の教え子で、最後の証言者ともいべき海野力が、まさしく教え子の視点から「人間円谷弘論」を寄稿され、そのユニークな人生と人間性を活写されている。なお、「圓谷」の読み方だが、氏の教え子や関係者の多くも通称として「つぶらや」と読むことが多かった。しかし、愛弟子であった故・馬場明男や海野力が日々強調していたように「つむらや」と読むのが正しい。
- 2) ただ、そのような傾向の中でも、海野力の業績『圓谷弘先生伝』（海野：2006）は、圓谷の伝記的な人となりの解説以外にも彼の研究内容にまで踏み込んだ異色作である。その第五章「研究と著作」においては、圓谷の代表的著作八冊を紹介され、とくに『集団社会学原理』と『集団社会政策学』に関しては、かなりのページを割いてその概略を述べておられる。
- 3) 圓谷の代表作『集団社会学原理』にいたる氏の研究業績は、日本大学から再入学した京都帝国大学時代の卒業論文が基となる処女作『我国資本家階級の発達と資本主義的精神』（1920年、三田書房）、京都帝大時代の恩師米田庄太郎のジャーナリスティックな文体の影響を受けたと思われる欧米視察の成果書『社会学徒の描く世界』（1925年、文修堂）や当時の文化風俗を論評した『カフェー文化の諸現象』（1928年、社会学徒社）、また日本大学時代の山岡萬之助や京都帝大時代の戸田海市の影響のもとに執筆された『現代社会政策』（1926年、文精社）等に代表される。ただしこれら著作には、明確な集団社会学的発想が未だ見られない。1927年創刊の「社会学徒」誌上に展開された多

くの論考も同様であるが、そのなかでも、本論で取り上げる三論文は、後の『集団社会学原理』にいたる導火線のな位置づけにあることが明確に読み取れる。

- 4) 今日のデュルケム解釈ならば、神聖世界が担っていた集合表象に対する崇拝性が、社会の近代化・世俗化につれて個人という存在に対する人格崇拝に道をゆずっていった結果であるとの解釈も成り立ちうるだろうが、当時の圓谷のデュルケム理解は、第一論文にもみられるように、「基礎層たる神話意識が、非常に大なる基調として色づけ作用している結果、現代人にもその姿は強く生き生きとして継続しているのである。」と、集積たる意識の基層から自由ではない拘束性を強調するところに、その特徴があったとみるべきであろう。

文献

- Durkheim, E., [1893] 1960, *De la division du travail social*: P.U.F. (=1971, 田原音和訳『社会分業論』青木書店)
- , 1912, *Les Formes elementaires de la Vie religieuse; Le Systeme totemique en Australie*: Paris. (=1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』岩波文庫)
- 細谷恒夫責任編集・解説, 1970, 『世界の名著51巻ブレンターノ フッサール』中央公論社.
- 川合隆男ほか, 1998, 『近代日本社会学者小伝一書誌的考察』勁草書房.
- 松岡雅裕, 2008, 「円谷弘のBibliography」『社会学論叢』No.162: 17-21.
- 田島節夫, 1981, 『フッサール』講談社.
- 圓谷 弘, 1929, 「階級の社会学的一考察—階級の永存性と上下観念の厳存性」『社会学徒』3(1): 1-3.
- , 1933, 「人格主義の否定」『社会学徒』7(1): 1-5.
- , 1934, 「社会学徒の観たる日本芸術」『社会学徒』8(8): 1-5.
- 海野 力, 2006, 『圓谷弘先生伝』文成印刷.